

## 巻頭言

### 何物も孤立していると思わないこと

#### Reputare nihil insulatum

徳丸 吉彦

TOKUMARU Yoshiko

私は毎日のように、「生活と工学」の深い関係を意識して暮らしています。大学での勤務が20時までに終わる場合は、一人でも自宅に戻って食事を作ります。家に入り、洗濯機をセットし、それから食事の準備に取りかかります。井戸で水を汲むわけでもなく、炭火をおこすわけでもなく、水道とガスと電気を使います。電子レンジの恩恵も受けています。1月のある日は、宮崎県椎葉村の友人が送ってくれた鹿肉を冷凍庫から出してカルパッチョにし、冷蔵庫に保存していた猪肉を焼きました。台所に立って20分くらいで、食卓に座れました。このように現在の食文化は、冷蔵庫と冷凍庫を含め、生活に密着した工学的な装置と社会システムによって成り立っています。

私が専門とする音楽もそうなのです。音楽は工学とは離れたところにあるように見えますが、実際は工学だけでなく、それと相補的な関係にある社会・文化的システムにも大きく依存しています。例えば、私が活性化に力を貸してきたベトナムの宮廷音楽にしろ、邦楽にせよ、今日のように従事する人が少なくなった背景には、こうした音楽を抑えようとした文化政策にまず責任があります。しかし、それだけではありません。楽器産業をはじめとする工学が、他の音楽様式に絶対的に有利に働いていたのです。より有効な工学的な手段を獲得した音楽様式は、他の音楽様式を結果的に抑圧することになります。これを多くの人は自然淘汰と勘違いしています。

昭和30年代から日本で盛んになったリコーダー（ブロックフレーテ）を思い出してください。これはバロック時代には木製であった縦笛ですが、日本の義務教育で使用するためには、大量生産ができる他の材料が必要になりました。東ヨーロッパのある国では、真鍮でこれを作りましたが、日本ではすでにプラスチック産業が盛んでしたから、種々のプラスチックで作って、全国の小学生に配ることができました。ピアノや他のキーボード楽器が戦後の日本で普及したことも、日本の産業構造と工学的な高い技術なしには考えられなかったものです。これらの楽器とその音楽が、日本における西洋音楽の普及と邦楽の抑圧に大きな役割を果たしたのです。

音楽を再生する装置も、音楽様式の普及に深い関係をもっています。私自身の経験を振り返ってみます。私が最初に声を録音したのは戦争中のことで、手段はSPレコードでした。歌を歌って戦地にいた叔父に送りました。音楽を聴くのもSPレコードでした。その後、LPレコードの時代になり、自分でもずいぶん聴くだけでなく、LPのアルバムを企画したり解説しました。こうした手段は世界的な規模で、それほど大きな役割を果たしていませんでした。1970年代でも、ミャンマーの音楽を録音して、レコードを作り、それをヤンゴンの音楽学校に送ったところ、聴く機会がないから、別の手段に変換するように依頼されました。それが、1960年代から盛んになるカセット・テープでした。この手段の普及は、世界的に非常に大きな意味をもちました。大きなスタジオをもたないような小さな民族も、みずからの音楽を録音して普及させることができるようになったからです。中南米やアジアの経済的に豊かではない国の人々が、外国のレコードを買って音楽を聴くのではなく、自分たちの音楽を発信するようになったのです。

しかし、CD生産や放送のシステムが強力な国では、こうした小規模な発信が目につかず、制度が認め、制度が普及させる音楽が、制度に乗りにくい音楽を結果的に抑える形になっています。自分たちの生活を工学とシステムの観点から再度見直すことが必要になっていることを痛感しています。それは、個々のものを孤立させて考える方法では不可能です。表題のラテン文は私の創作ですが、私の見方を示すものです。

(大学院人間文化研究科長・音楽学)